

# 天を仰ぐ

創世記 15 : 1－6

ルカによる福音書 12 : 32－40



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第9主日

2025年8月10日

聖光教会にて

昨日 8 月 9 日は長崎原爆の日、そして今週金曜日の 15 日は 80 回目の敗戦記念日です。この時期になると新聞でもテレビでも戦争の悲慘が伝えられます。わたしも特に夏には戦争に関する本を読むようにしています。平和への願いを強める大切な時期です。

ところが現実には、まったくそれとは正反対のことが起こっています。ガザでは何の罪もない何万人もの人々が殺されている。世界では軍備拡張が進められ、平和憲法を掲げているはずの日本でも、アメリカの要求に応じて莫大な費用を投じて軍事基地拡張、軍備増強を行いつつある。私は最近、その具体的な現実を明らかにした本を複数読んで、恐ろしい気持ちになっています。

そうした時期、日本と韓国の聖公会の主教会は共同で「8・15 日韓聖公会共同宣言」を出しました。非常に重要だと思いますので、その一部をご紹介します。

全体は 2 頁で、「歴史を悔い改めて」「現在を省みて」「未来に向かって約束します」「主の召しにこたえて」の四つからなっています。その「現在を省みて」の一部です。

「いま世界は戦争と紛争によって苦しんでいます。『ガザでのジェノサイド』、『終わりの見えないウクライナ戦争』、そしてあらゆる地域で紛争が起こっています。このような時だからこそ、キリスト者は『平和を造る者』としての使命を思い起

こさなければなりません。日本は戦後、神様の恵みによって平和憲法を制定し、戦争を放棄し、あらゆる武力を持たずして平和を追求する国となりました。これは『剣を打ち直して鋤とし』という神さまのみ心を実現する貴い賜物でした。私たちはこの平和の精神を大切に守り、さらに発展させていく責任があります。……」

軽く読み流してはいけない内容です。たとえささやかであっても、わたしたちに何ができるかを祈りつつ考えて、実践にかなげていきたい。そのことが、イエスがわたしたちに告げられた「神の国」につながります。

さて今日の旧約聖書です。遠い昔、アブラハム（元はアブラム）は神の呼びかけに従って、一族を率いて遠い旅をし、ヘブロンという所に天幕を張って生活をしていました。今のパレスチナの「ヨルダン川西岸地区」です。アブラハムはそこではよそ者であって、土地の人々、異なる民族の間に暮らしていて、できるだけ平和な関係を築こうと心を砕いていたのです。

アブラハムには深い悩みがありました。それは、神さまが沈黙しておられる、ということでした。確かに神はかつて、自分に語りかけて、子孫と安住の地を与える約束をされた。けれどもその約束は実現せず、自分たちはだんだん年老いていく。今

は一応周りと平和な関係を保っているとはいえ、いつ戦争に巻き込まれるかわからない。自分たちはこんな遠い異国に来て、やがて滅びてしまうのではないか。天幕の中で、毎晩アブラハムは重い気持ちに沈んでいました。しかし、この夜、神は長い沈黙を破って、彼に語りかけてくださったのです。

「これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。『恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。』創世記 15:1

アブラハムはどんなに驚き、また励まされたことでしょうか。けれどもそれで安心できなかった。彼の苦悩と不安はあまりに大きかったのです。彼は、神さまに率直に訴えかけます。

「アブラムは尋ねた。『わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。』アブラムは言葉をついだ。

『御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。』

見よ、主の言葉があった。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』」15:2-4

ここでわたしたちがアブラハムから学びたいのは、神さまに率直に訴える、苦情を言う、ということの大切さです。従順であることはもちろん大事です。しかし神さまとのやり取りとい

うか、場合によっては格闘から、何かが開ける、ということがあるのです。

アブラハムの悩みと訴えを聞かれた神は、言葉で説明をされませんでした。ただアブラハムに、今、天幕から外に出てみなさい、と言われました。彼は言われるままに天幕の外に出ました。主は言われました。

**「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」 15:5**

頭を上げた彼の目に映ったのは満天の星でした。無数の星が輝いています。無数の星を抱く天が、自分たちを大きく包んでいます。

**「『あなたの子孫はこのようになる。』**

**アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」15:6**

創世記第 15 章はこの後、神とアブラハムの契約という非常に重要な場面に進んで行くのですが、今は触れることができません。今日は、アブラハムが主に言われて「**天を仰いだ**」ことに注意を向けましょう。天を仰いで無数の星を見たことから、彼の信仰は新たに呼び覚まされたのです。わたしたちも、自分の天幕から出て、天を仰ぎたい。

ところでアブラハムが天を仰いだように、主イエスもその生涯の中において、何度か天を仰がれたことを福音書は伝えてい

ます。

あるときイエスのもとに、耳が聞こえず口の利けない人が連れてこられました。イエスはその人のこれまで負ってきた悲しみ、言葉にできなかった苦しみをご自身の心と体に感じられました。そのとき、イエスは天を仰がれた。天を仰いで嘆息されたのです。こう書かれています。

「イエスは天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッファタ』と言われた。これは、『開け』という意味である。」

マルコによる福音書 7:34

その人は耳も口も開かれました。新しい彼の人生が始まりました。

もう一つの場面です。イエスの話を聞こうと集まったおびただしい人々を前にして、話し終えてからイエスはその人たちの飢えと疲れを心配されました。

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それを祝福して裂き、弟子たちに渡しては群衆に配らせた。」

ルカによる福音書 9:16（聖書協会共同訳）

人々は満たされて喜びました。

わたしたちも天を仰ぎましょう。ぼんやりと空を眺めるのもよい。けれども時にはもっとしっかりと、天の中に食い入るように、天の神さまを捕まえるくらいの思いで、天を仰いで祈り

ましょう。アブラハムがそうであり、イエスさまがそうだったのですから。

そのようなわたしたちに対して、主イエスの約束が聞こえてきます。今日の福音書です。

**「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」ルカによる福音書 12:32**

「恐れるな」これはアブラハムも聞いた言葉でした。「小さな群れ」ただ数が少ないというだけではなく、力のない、悩みしばしば失望する者たち——つまりわたしたちのことです。しかし神さまが愛しておられる群れ、主イエスの大切な羊の群れ、祈りの群れなのです。

**「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」**

この世が与えない最高のもの、神の国を神さまはくださる。

そしてイエスはやがて天から帰ってこられます。

「主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕<sup>しもべ</sup>たちは幸いだ。はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。」

ルカ 12:37

主人とはイエスのことです。イエスさまは僕であるわたしたちのために、逆にみずから僕となって食事を用意し給仕してく

ださる、というのです。わたしたちがここでいただく聖餐は、その最高の食事の前祝いです。

わたしたちの将来に待っているこの喜びの日のために、わたしたちは今日から天を仰いで祈ります。

神さま、わたしたちはしばしば困難の中に沈み込みます。けれどもアブラハムがそうだったように、イエスさまがそうだったように、わたしたちにも天を仰がせてください。祈らせてください。主イエスが再び天から帰ってきてわたしたちを迎えてくださるその日を信じて、わたしたちに託された働きをなすことができるように励ましてください。主の御名によってお願いいたします。アーメン